

所属：奈良県立医科大学付属病院

【訪問日】

令和3年 8月 1

【訪問施設】

千里山病院

【見学内容概要】

zoom を通し、集学的診療外来の4名の再診患者の診察を見学し、また、理学療法士の行うリハビリ風景を見学させていただいた。その後、多職種カンファレンスの様子を見学させていただいた。

【見学に訪れて学んだことや感想など（200～400字）】

診察では薬剤処方ほとんど行っていないと知り驚いた。リハビリでの介入が中心となっていたが、診察に来院していた患者は満足されている印象であり、あらゆる職種と協同し介入することで薬剤以外の治療が可能になっているのだと感じた。診察で一番印象に残っているのが、主訴に挙げられていない部位のリハビリ実施で症状が緩和されていると患者自身が感じていたことである。診察で患者の訴えを聴き、以前との比較や患者の努力、考えを認めながら話をされていたのも、患者にとって自信や安心感を与え、苦痛緩和の一端を担っていたのではないかと感じた。

貴院では集学的診療のチームとして看護師が活動していなかったため、当院では自分たち看護師にできることが何なのかチームで考え、見学で学ばせていただいたことを生かし活動できるようにしていきたいと考える。

【訪問日】

R3年8月

【訪問施設】

千里山病院

【見学内容概要】

集学的診療外来で1名の初診患者の診察をwebで見学した。また、初診患者や入院患者、継続通院の患者のカンファレンスを見学した。

【見学に訪れて学んだことや感想など（200～400字）】

初診の患者を見学し、問診のとり方や具体的な流れがとてもイメージしやすくなりました。複数の専門家が関わるため、時間配分がとても大切だと改めて実感しました。カウンセリングでは、曖昧なことをあえて曖昧なまま扱うこともありますが、心理面への介入に抵抗を示す患者様や知的な能力の低い患者の様には、特に意識して明確に目標を示し共有することや抵抗を示す部分への配慮(嫌なら介入しないと保障すること)が大切で、その中で身体化と心理面での課題の両者ともが、患者様にとって、上手く付き合える状態となるように見守っていく作業が、継続して関わる場合の心理士の役割ではないかと思いました。

【訪問日】

令和3年8月

【訪問施設】

千里山病院

【見学内容概要】

集学的治療の見学

カンファレンスの見学

【見学に訪れて学んだことや感想など（200～400字）】

初診患者の受け入れの流れについて見学。診療情報提供書を元に情報共有を行い、プレカンファレンスを実施。その後、医師、理学療法士、作業療法士、心理士による問診が実施され個別に評価される。各問診の評価、治療方針を決定するためのポストカンファレンスを実施。その後医師より今後の治療方針について説明。全体カンファレンスを通し、初診患者の紹介や現在治療中患者の経過報告、意見交換を実施。

各職種により無駄なく短時間のなかで情報収集されていた。それぞれの分野で必要な情報をとるとともに、共通して痛みに関する情報収集されていた。各分野からの視点で身体的、心理的意見交換が実施され、患者や患者自身を取り巻く環境を考慮して、丁寧にカンファレンスを実施され、その人に合った治療方針を検討されていた。

千里山病院での集学的治療に看護師はチームの中に含まれなかったが、当院で運営が開始時は看護師もチームの一員となる。問診、情報収集を主体として活動する予定である。基本的な生活状況や身体的症状の情報収集だけでなく、患者の身近な存在として、症状による不安や悩みなど傾聴できる存在として活動していきたい。

モデル事業実績 見学報告書フォーマット

【見学者】

奈良県立医科大学附属病院 ペインセンター

【訪問日】

2021年8月

【訪問施設】

千里山病院 (Web 配信)

【見学内容概要】

初診患者のカンファレンスを中心に見学した

【見学を訪れて学んだことや感想など (200~400字)】

それぞれの職種が、忌憚なく意見を交わしている様子を見学できて、チーム医療として連携がうまくいっているとの印象を受けました。どのようなマネジメントを行うかに興味がありましたが、長年取り組んでこられて、今のシステムがあると理解しました。特に、作業療法士が集学的治療に参加している施設は少ないと思いますが、慢性疼痛診療に貢献できる職種であると感じました。集学的治療は型にはまったものではなく、我々の施設で特徴のある外来を行っていかうと考えています。

モデル事業実績 見学報告書フォーマット

【見学者】

奈良県立医科大学附属病院 ペインセンター

【訪問日】

2021年8月

【訪問施設】

千里山病院 (Web 配信)

【見学内容概要】

初診患者のカンファレンスを中心に見学した

【見学に訪れて学んだことや感想など (200~400字)】

今回は、特に外来のマネジメントに興味をもって参加しました。前半の質疑応答では各職種の先生から、実際に外来を行う上での注意点などを伺い、とても参考になりました。

柴田先生が「通常のペインクリニック診療と同じだよ。」おっしゃったことが、非常に感銘を受けました。外来を開設するにあたり、すでに完成したレジメ通りに型にはまった診療をしなければいけないと思っていたところがあったので、患者に合わせて理学療法も心理療法もブロック治療や内服治療のように柔軟に組み合わせて、その頻度も病期により決めればよいと教えて抱き、肩の力が抜けた気がします。

集学的治療の根幹にある考え方、すなわち患者のADLに介入する治療、患者の能動的な治療に注意して、奈良医大らしい集学的治療を作っていきたいと思います。

この度は、web 見学を開催いただきありがとうございました。

【訪問日】

2021年8月

【訪問施設】

千里山病院慢性疼痛外来

【見学内容概要】

集学的診療外来で数名の再診患者の診察を見学した。また、全体のカンファレンスや理学療法、作業療法を見学した。

【見学に訪れて学んだことや感想など（200～400字）】

この度はwebでの見学を企画してくださりありがとうございました。

実際に見ると、考えていたのでは印象が違うことが多く、とても勉強になりました。

Web見学は初めてでしたが、実際に伺っているのと同じように質問ができ、カンファレンスにも参加でき、大変充実しました。

見学するまでは、集学的治療センターとはペインクリニックに臨床心理士も作業・理学療法士も診察をしてくれる時間をかけた贅沢な外来なんだろうか、という印象でした。また、ここでの医師の役割は従来とどう変わるんだろうというのが一番の疑問でした。

見学後は、医師は心理士、作業・理学療法士のまとめ役と治療方針の決定をカンファレンスの短い時間で行うスピード感と、決定を簡素化して伝える技術が必要であると感じました。また作業療法士や理学療法士が痛みの変化に固執せず、気持ちの変化も注意深く観察していることは連携がうまくいっている一つのような気がしました。

内服や神経ブロックをあえて提案しないことに初めはびっくりしたのですが、従来のペインクリニックでの治療が適応と判断した場合には通常の外来枠に回せること、また従来のペインクリニックでは治療がうまくいかなかった人が対象の外来なんだという柴田先生のお話で納得がいきました。

当科でも9月から集学的慢性疼痛外来が始まります。この経験を生かして、患者との新しいかわり方を勉強したいと思っています。

モデル事業実績 見学報告書フォーマット

【見学者】

奈良県立医科大学 麻酔ペインクリニック科

【訪問日】

2021年8月

【訪問施設】

千里山病院（web 配信）

【見学内容概要】

Web 配信で集学的診療外来に受診された1名の初診患者の診察を見学した。

（受診場所：奈良県立医科大学手術室カンファレンスルーム）

【見学に訪れて学んだことや感想など（200～400字）】

全てのスタッフが患者の話を遮らず、患者に興味を示し、傾聴していたことや、痛み的事よりも、患者の成育歴、生活歴、現在の生活、家人との関係、患者の感情などにフォーカスして問診していたため、患者がどんな人でどんな暮らし方をしているのかというのが良く理解できました。また、患者が話したくなる雰囲気づくりができていたと感じました。患者の話が、横道にそれてしまったり同じ場所でグルグルと回ったりという事が少なかったのは、スタッフがうまくリードできているのだと感心しました。スタッフがそれぞれの専門的な知識を持ち寄り、活発におこなわれたカンファレンスが印象的でした。見学で学んだことを参考に、我々も自分たちなりの慢性疼痛外来を構築したいと思います。ありがとうございました。

モデル事業実績 見学報告書

【訪問日】

R 3年 8月

【訪問施設】

千里山病院集学的痛みセンター

【見学内容概要】

集学的診療外来で 3 名の再診患者の診察を見学した。また、療法士によるリハビリテーションを見学した。

【見学に訪れて学んだことや感想など（200～400字）】

初診では、それぞれの職種が聴取しているという様々な項目を聞き、痛みには様々な要素が関わっていることを再確認した。特に、受診行動や医療不信に関しての項目や、対人関係、仕事上の問題など精神・心理面に関しては、とても繊細な問題であり、初対面でどのように聴取するかを慎重に考えなければならぬと感じた。また、このような繊細な問題に対してチームで取り組むという点では、患者にとっても医療者にとっても効率的で効果的であると感じた。

再診患者の診察では、「痛みはあまり変化はないが、リハビリを頑張って、活動が増えた」という発言があり、痛みの原因に対する直接的な介入ができなくても患者の QOL を向上させることを改めて認識することができた。また、複数回の治療を受けずに終診となる患者もおり、患者が何を求めているのか、どういった点に満足しているのか、また満足できなかったかなど、一人ひとりを振り返ることの重要性もより一層感じた。

【訪問日】

令和3年8月

【訪問施設】

医療法人篤友会 千里山病院 集学的痛みセンター

【見学内容概要】

集学的痛みセンターを受診された1名の初診患者に対する集学的治療の実際について、診療やカンファレンスの様子をWEBにより見学した。

【見学に訪れて学んだことや感想など（200～400字）】

今回の施設見学について、直接訪問ができなかったことは非常に残念でしたが、急遽WEBによる対応をしていただけたことで、初診の患者が集学的治療を受ける実際の様子を見学することができ、とても感謝しております。

その中で柴田先生は、「患者さんは痛みで困っているのに特にどこも悪くないといわれる。困っていることに対するケアはできる。大事なことは患者自身のしたいことが痛みによって妨げられないようにしていくこと。」とお話しされていました。また、スタッフの皆様がそれぞれの役割を持って患者の痛みと丁寧に向き合っておられるという印象を受けました。

集学的治療の中で、患者の話を聴くということが非常に重要であり、その人が抱えているものを理解しその人の痛みと向き合う、そして相互に納得できるものを見出し治療することが集学的治療で大切なことであると学びました。

私たち看護師は、傾聴すること、患者を全人的に捉え観察し分析しケアを行うことを得意としています。奈良医大での集学的治療の中での看護師の役割について考え担っていきたいと思います。